

# 北村久雄の音楽教育論と生活の信念

学校教育開発学コース 藤井康之

Hisao Kitamura's Music Education Theory and His Belief of Life

Yasuyuki FUJII

The aim of this study is to give a description of specific character of Hisao Kitamura. As is shown "Mazushiki Chichi—Eiji Ushio ni Ataete (A Poor Father: To My Baby Ushio)" and "Sabishii Tsuma to no Hanashi (A Story of My Lonely Wife)", retrospective essays published in education magazine "Kyoiku Bungei" in 1914, in which he expresses his personal feelings without reserve, Hisao Kitamura strived to live as an art teacher—and this includes teaching of beliefs he gained through a life in poverty—as well as his ideal as a music teacher.

The contents of the study are as follows. First, I focus on Kitamura's education of "musical aesthetic intuition". Then, I explain Kitamura's personality against backdrop of trend of thought in the Taisho era, which attached great importance to personality. Finally, I reveal a connection between the beliefs he gained through his troubles and suffering in real life and his approach to music education.

Kitamura's style as an art teacher—teaching was an inherent part of his life—is a typical example of a teacher in the new education trend of the Taisho period.

## 目次

はじめに

### 第1章 北村の音楽教育思想

#### 第1節 「音楽的美的直観」の教育

#### 第2節 教師の人格の重視

### 第2章 北村の信念

#### 第1節 「教育文芸」の特徴

#### 第2節 困窮する生活—「ゴマカサナイ生活」を生きる—

### 第3章 音楽教育論への連動と特質

おわりに

はじめに

北村久雄(1888-1945)は、大正期から戦中期にかけて、長野市城山尋常高等小学校や神戸市東須磨尋常小学校などの音楽訓導として生涯実践活動を行うかたわら、理論家としても多くの著書・論文を世に送り出すことによって、当時の音楽教師たちに影響を与えた人物である。大正期における北村の先進性は、明治期以来の「徳性の涵養」の手段として扱われてきた唱歌教育

を打破しようと試み、音楽本来の美的価値を全面に打ち出した音楽教育論を主張したこと、歌唱活動が中心に行われた時代に、鑑賞活動、基礎活動を加えた総合的な音楽教育のあり方を探求したことにより、唱歌教育から音楽教育への転換を促した旗手の一人である<sup>1)</sup>。しかしながら、北村についての先行研究はほとんどなく<sup>2)</sup>、当時の音楽教育状況を語る際に部分的に引用される程度にとどまっている。

北村が教職に就きはじめた明治末期から大正期にかけての長野では、信州白樺運動<sup>3)</sup>、自由画教育運動<sup>4)</sup>、新カント派のシラーを中心とする美的教育<sup>5)</sup>などの芸術教育運動が振興した時代であり、長野県下の多くの芸術教師と同じく、彼もこれらの芸術教育思潮に薫陶を受けている。北村の音楽教育論、すなわち「音楽的美的直観」の教育には、上述の芸術教育運動の理論的支柱となった芸術家、教育者、哲学者、美学者などの影響が色濃く見られる。さらに北村において注目されることは、「音楽的美的直観」の教育にふさわしいように彼自身の生活を生きようとし、真の芸術教師にならんとしたことである。その背景には、当時風靡していた教師の人格を重視しようとする動きがある。北村も音楽実践にあたり、教師の人格を反映した教育がなに

よりも肝要であると、著書や論文で再三にわたり主張している。

1914(大正13)年、「音楽的美的直観」の教育を完成させた北村は、教師のアイデンティティを模索しようとする『教育文芸』に、「貧しき父—嬰兒潮に与へて—」<sup>6)</sup>と、「淋しい妻とのはなし」<sup>7)</sup>という私的心情を赤裸々に告白した随想を寄せている。これらの随想には、窮乏生活における彼の葛藤や苦悩が鮮明に描き出されている。音楽教育史に関していえば、例えば当該期の綴方教師のように、自己の悩みや生き方の信念を吐露した史料はほとんど存在しない。本論で使用する史料は、当時の音楽教師の生活状況や内面の一端を知る上においても、さらに教師のあり方と個々の教師が創出する音楽実践の根幹を理解する上においても、たいへん興味深い。

大正期は、とりわけ教師の教職観と現実の生活観との深刻なディレンマが顕在化した時期であった。北村のこれらの随想においても、音楽教育についてはいっさい触れられておらず、もっぱら彼が当時直面していた悩みと、そこから導き出された生き方の信念について語られており、北村の両者間におけるディレンマを確認することができる。

本論の関心である教師個人の信念と教育思想とは、必ずしも一致しない場合もある。しかしながら北村の場合、「性情と生き方とは、その生活の凡てに浸透して行つた。教育精神にも芸術上の意見にも、また人生観にも」<sup>8)</sup>と語っているように、彼の生き方の信念と音楽教育論とは相即不離の関係を築き、その関係は戦中期に至るまで貫かれている。

本論では、当時北村が置かれていた生活状況に対する心情を綴った史料を用いることによって、生活とそこから得られた信念を含めて、芸術教師として生きようとし、「音楽的美的直観」の教育を具現しようとした彼の姿を照射することにしたい。

以下、まず北村の「音楽的美的直観」の教育について言及し、次に当時の教師の人格重視の思潮と北村の人格論を浮き彫りにする。最後に北村が現実生活において感じていた葛藤や苦悩から得た信念と、彼の音楽教育論との連動性を描出することにする。

## 第1章 北村の音楽教育思想

### 第1節 「音楽的美的直観」の教育

北村が自らの音楽教育論を打ち立てる出発点には、「唱歌科」を規定づけていた「唱歌ハ平易ナル歌曲ヲ唱

フコトヲ得シメ兼ネテ美感ヲ養ヒ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス」(教則第九条)という唱歌教育の目的への強い反発があった。すなわち、音楽の価値がそれ自体に置かれず、「徳性ノ涵養」という外延的・功利的な目的の手段としておとしめられてきた従来の唱歌教育に対する批判であった。北村は、音楽独自の価値を取り戻すために、「音楽には何等の観念も付纏つて居ない。又音楽は如何なる観念をも表現するのではない」<sup>9)</sup>と明言し、「自律的な音楽」の立場に依拠することによって音楽を形づくる音、構造以外のあらゆるものを捨象し、音楽固有の自律性と独自性を固守しようとする。彼は、芸術の中でも唯一音楽だけが表象的内容にその美が左右されずに、それ自体に絶対的な美的価値が在するものとして音楽を最優位に位置づける。そして、国家のための偏狭したイデオロギーと結びつく音楽教育ではなく、音楽そのものの響きによって純粋な音楽美の状態、すなわち「音楽的美的直観」の世界へと子どもを導き同化させることを目的とした「音楽的美的直観」の教育を標榜し、従来の唱歌教育のあり方を克服しようと企図した。

芸術教育運動の思潮が深く浸透していた当時の音楽教育界において、北村の考え方は決して珍しいものではない。例えば、北村と同時代に活躍した小出浩平は、『唱歌新教授法』(1927年)の中で、「『徳性ノ涵養ニ資スル』を以て唱歌を自殺せしめてみた」<sup>10)</sup>という見解を示し、「音楽は、概念なき純粹感情によつて生命の神秘にふれて行く美の世界であるといつてよいであらう。音楽の独自の芸術的価値があり、教育的価値があると思ふ。だから唱歌教授の目的もそこに着眼して、音楽による芸術教育を示眼したらよいと思ふ」<sup>11)</sup>と主張していることから、北村の考え方は当時の主流の一つをなす思想であった。

さて、北村の「音楽的美的直観」とはどのようなものなのだろうか。彼は次のように説明している。

「音楽的美的直観に依る教育、音楽的美的直観への教育、こゝに私の音楽教育唱歌教授の出発点がある。美しい深い音楽を聴くことに依つて、児童の音楽的美的直観が培養されて行く、また純美な歌を歌ふことに依つて、児童の音楽的美的直観は愈々深まつて行く。是れが音楽的美的直観への教育である。私達の人格的理想が真、善、美の合一したものを要むるにあるとすれば、この合一点は実に芸術的直観〔美的直観〕の立場でなければならない。そこで音楽的直観に依つて、人格的理想の立場に児童を導か

うとするのが、私の音楽教育唱歌教授の主眼である。』<sup>12)</sup>

「音楽的美的直観」の教育を通して北村が理想化したものは、音楽美による「人類的愛」「人類的親和」<sup>13)</sup>に満ちたユートピア的な社会・国家であった。その社会・国家を築き上げるために、表現活動と鑑賞(観照)活動の双方の相互作用を基盤としつつ、「音楽的美的直観」の体験を通し、子どもと音楽を融和させ、子どもの内に潜在する音楽的本性を陶冶させるとともに、音楽に包摂される普遍的客観的な真・善・美による全人格的な人間形成をなさしめることが緊要であると、北村は痛切に感じたのである。こうした特質を持つ北村の音楽教育論では、音楽美による人格陶冶から産み出される純美な心を有する子どもの姿が理想化され描かれている。

北村の音楽教育思想の背景には、信州白樺運動や自由画教育運動の芸術教育思想に加え、古代ギリシアのカロカガティア<sup>14)</sup>に思想的源流を持ち、近代化されたシラーの「美しき魂」の思想、さらには近代化社会における科学と技術との重圧に拮抗して生まれた19世紀から20世紀のヨーロッパで展開した芸術教育運動に見られる人間文化における美や芸術の中心的意義を強調し、これを根本原理として広く人間形成をなそうする美的教育思想が存在している<sup>15)</sup>。特に、明治末期から大正期にかけて芸術教育者たちに広く読まれた西田幾多郎、ベルグソン、ショーペンハウエル、シラー、クローチェ、ハンスリック、デューイ、リンデ、ミュンスターベルクらの思想<sup>16)</sup>は、北村に多大な影響を与え、理論的根拠となった。大正期に隆盛した思想を積極的に吸収し構築された「音楽的美的直観」を支柱とする北村の音楽教育論は、芸術としての音楽教育の立場から音楽固有の美的価値を重視しつつ、子どもを中心とした教育を打ち出したものであると同時に、歌唱活動と鑑賞活動、さらに基礎活動の総合的な音楽教育のあり方を探究したものであった。

## 第2節 教師の人格の重視

北村は、「音楽的美的直観」の教育を具現化する際の重要な事柄として、教師の人格を強く主張している。なぜなら、子どもを美的陶冶するためには、「教材に対して教師の人格的色彩を加はることが、最も必要な要件」であり、「教師の内部に、心情が躍動して、始めて児童の心情にも共鳴を起さしむることが出来る」<sup>17)</sup>からである。実際、彼は「『さあ、どんなによいか聴い

てみて下さい』と最も巧みに、熱情溢るゝばかりに、弾奏して聴かせるのも一つの方法であらう」<sup>18)</sup>と、教師の情熱を傾けた音楽実践を提起している。教師の人格を重視する北村の見解は、信州白樺運動の思想はむろん、北村が教師をしていた長野県の教育界に浸透していた新理想主義哲学のオイケンの人格的教育学<sup>19)</sup>の思想、さらにはリンデの人格教育論<sup>19)</sup>に基づいている。とりわけリンデの影響は大きく、『音楽教育の新研究』においてリンデの見解に基づいて教師の人格論が考察されていることから分かる<sup>20)</sup>。

さらに北村は、教師が自身の生活、人間や芸術に対する深い洞察と情熱を持つことを課題とし、次のように述べている。

「彼等(筆者注：音楽教育者)は生活に対する何等の内省もなく人間性に対する何等の省察もなく、従つて芸術に対する真の理解もなく生きてゐる(中略)人間と云ふもの即ち人間性に対する何等の内察も理解もなく、また音楽教育の芸術的根本義を闡明することもなくて、音楽教師としてどうして真に生きて行くことが出来やうか。」<sup>21)</sup>

北村が教師の人格にこだわり重要視する根底には、明治期以来学校教育において蔓延していた定型の授業を厳格に行うだけの教師や、生計の資を得るために仕方なく奉職する教師への不信や反発もあったが、なによりも彼は子どもを自らの理想とする姿へと導くために、音楽に直截に反映される教師自身の心持ちやあり方を、その理念にふさわしいようにしてなくてはならないと感じたからに他ならない。そして、北村は理想とする教師の人格にならんとするために、当時困窮生活にあった自らの生活を人格の修養の場として生きている。

## 第2章 北村の信念

### 第1節 『教育文芸』の特徴

まず、北村の信念がどのようなものであったのかを述べる前に、彼が随想を寄せた『教育文芸』とはどのようなものであったのだろうか。木戸若雄は『教育文芸』に対して、「師範教育で型にいこまれた教師の人間の開放」を謳った雑誌であり、「これまで学術誌であり、評論誌であり、そして解説誌であり、報告誌であった教育雑誌の世界に、初めて表れた教師の人生探究誌であ」<sup>22)</sup>と評しているが、事実、『教育文芸』を発刊し

た桜井祐男は、創刊号の冒頭の「巢立する言葉」の中で、「教育として子どもが完全に育たうことを第一義とするは私もそれを拒否しない。が、それと同時に、私<sup>ら</sup>だち教師の人生も完全に営まれようとすることを要求する」<sup>25</sup>「教育の諸形式も、それに生命(いのち)あるいぶきを吹き込み一の生体として機能づける私<sup>ら</sup>だち教師の人生的高鳴りと踊躍がなくば、決して動き出るものではない」<sup>26</sup>「教育は『子どものため』といふ美名を冠するよりも、『教師のため』といふ醜名を冠すべきだ」<sup>27</sup>と表明しており、本誌は教師である前に人間である姿をさらけ出し模索する場として構成されている<sup>28</sup>。当時の教育思潮に対して、子どもの個性や自発性の尊重がよくいわれるが、野村芳兵衛が当時の教育の様子を述懐するように、「大正時代の若い教師は(中略)子どもたちを解放するとともに、自分たち自身の自我解放をも願った」<sup>29</sup>時代でもあった。まさに『教育文芸』は、「論説・随筆・詩・短歌・俳句・創作(小説)といろいろ」<sup>30</sup>な表現スタイルをとりながら、このニーズに呼応する形で機能したのであった。

このような特徴を持つ雑誌であるため、北村も音楽教育そのものを論じるのではなく、自身の内的苦悩や葛藤を赤裸々に告白している<sup>31</sup>。彼はこの雑誌に、「潮よ…」ではじまる子どもへの語りかけ口調で、自身の生き方を説いた「貧しき父—嬰兒潮に与へて—」と、妻との日常生活でのやりとりを綴った「淋しい妻とのはなし」という随想を寄せている。彼自身、「僕の書くものが、自分の貧乏生活の表自であることや、又それがよく妻に関した事」<sup>32</sup>であると述べているように、どちらも北村の困窮生活の様子が夫婦のやりとりを交えながら語られており、そこには困窮生活から得た彼の生き方の信念がはっきりと浮き彫りにされている。

## 第2節 困窮する生活—「ゴマカサナイ生活」を生きる—

「貧しき父」では、住居のこと、給料とその使用方法のこと、借金のことなどを含め、北村の当時の困窮生活の様子が忌憚なく告白されている。当時、北村はどのような生活を送っていたのであろうか。

明治期から続く小学校教員の棒給の劣悪状況は、大正期に入って一層深刻化し、1917(大正6)年の「臨時教育会議」における諮問第一号「小学教育ニ関スル件」の中で、市町村立小学校教員棒給の国庫負担問題が論議されている。その結果、1918(大正7)年に「市町村義務教育費国庫負担法」が公布されることになり、小学校教員の棒給平均額は1917(大正6)年度の月棒20円33銭から、1920(大正9)年度には59円77銭にまで上がっ

ている<sup>33</sup>。この法令の発布により、すべてが解決したわけではなく、その後昭和期に入っても、小学校教員棒給改善の問題は教育ジャーナリズムにおいて盛んに論議され続けている<sup>34</sup>。神戸に赴任した当時の北村の給料は60円に住宅料8円を加えた68円であり、改善後の平均棒給額とほぼ同程度であった<sup>35</sup>。その後給料は70円に上がり、1913(大正12)年頃には5円増棒されて75円となっている<sup>36</sup>。しかし北村の生活は楽になるどころか、かなり苦しかったらしく、さまざまな窮乏生活の様子が描出されている。

例えば、なじみの本屋で『芸術教育』と『芸術の生命』という欲しい本が二冊あったが、つげが払えていないために、なかなか本をわたしてくれず、北村が「何分は貧乏人の上棒給が低く金が無いために支払ひも思ふに委せない身であるが、そのくせ本を読まずには生きて行かれない憐れな人間だ」と懇願し、やっと手にすることができた話。このときの心境を北村は、「何と云ふみじめさだ」と吐いている<sup>37</sup>。

また、10年以上前に作った衣服を買い替えたくても、本代に給料のほとんどを費やしてしまうので、新しい衣服を買うのをあきらめた話<sup>38</sup>。北村はみすぼらしいなりをした自分について、次のように子どもに語りけている。

「潮よ、風が叫び雨が狂ふ日に、オーバーシューズと云ふものを靴の上にはめて、オーバーコートと云ふものを服の上に被つて、洋傘をさして行く多くの紳士の中に、紐の切れたぼろ靴をはいて、摩り切れた上着に、継ぎだらけのツボンのまゝで番傘をさして行く、中せいの三十以上のみすぼらしい男、是れがお前のお父さんだぞ。」<sup>39</sup>

このように北村の生活は切迫し、物質的な豊かさはなかった。その中で、彼のまなざしは物質的向上を志向するのではなく、「人としての生活をよりよく生くる」<sup>40</sup>ための精神的充足の方面に向けられている。このことを表す例をいくつかあげてみよう。

北村はある日、古本屋で掘り出し物を見つけたと喜び、十年來着ているぼろ服をもう一年延ばして着てもよいと決心し、「コンステブル、ラフエアル、ドオミエ、ライントレットなどの伝記本四冊」を廉価で買い求めている。彼は、衣服よりも精神的充足感が得られる本を優先させることによって、美の世界に浸る喜びを次のように語っている。

「お父さんはテイントレットの『天国』や『カルワリアへの道』や『牧人の礼拝』や『エジプトへの逃走』などに依つてどんなに自己霊の敬虔な救援を感じさせられるか知れない。それからまた『マーキユリーズとグレース達』や『ミディアンの女達』や『乳の泉』や『浴みのスザンナと長老達』を観ても、何もかも忘れて美のうちにさ迷ひゆくのである。」<sup>37)</sup>

北村の妻は、困窮生活にあっても本を買わずにはいられない夫について、「私はあなたといふものをよく理解して居る積りです。本を読むこともしなければ、考へることもなく苦しむこともなく、たゞ金でもためて喜んで居る様な平凡な趣味に生きて居る人を夫に持ち度くはありません」<sup>38)</sup>と述べている。

また、北村と同じ程度の給料で多くの家族を「物質上の不自由をさせない」で養っている人に対して、次のような興味深い考えを示している。

「けれどもお父さんは是れ等の人を感心もしなければ、勿論羨ましくも思はない。それどころか、自分の身につまされて非常な同情を寄せるばかりである。貧しい人間が多い為めに、彼れ自身の生活と創造とを犠牲にせねばならぬことを思ふとき斯うした食料労働に終始した生活が、如何に人間の精進を踏み荒す惨ましい事実であるかを痛感させられざるを得ないのだ。お父さんは今のところ此の意味では是れ等の人達よりはどんなに仕合せだか知れない。だからお父さんの貧乏はお父さんの生活生命を尊重するところから来る必然の産果だ。思へば喜び勇んで赤貧の患苦を甘受すべき筈のものであらう。」<sup>39)</sup>

北村自身、「お父さんは貧しくも内に生きるより外に方途を与へられて居ないやうだ」<sup>40)</sup>と語っているように、彼はこうした困窮生活を金銭的・物質的豊かさのために自らを俗化させおとしめる場としてではなく、むしろ美の世界に浸ったり、内的教養を深め豊かにするための精神的充足が得られる修養の場として見なすことにより、自らのアイデンティティを確立しようとしていた。このように精神的豊かさに生きる生活を、北村は「ゴマカサナイ生活」<sup>41)</sup>と表現している。しかし彼は、この「ゴマカサナイ生活」を生きるためにもがき苦しんでいる。その苦悩を次のように吐露している。

「自分をゴマカサナイ生活、是れはどんなにむづかしいことか知れない。併し自分をゴマカス生活、

是れもどんなに骨の折ることか知れない。お父さんは今でも折々自分の弱さから、自分の生活をゴマカス様なことがある。斯うした度に経験する苦痛も耐らないものである。お父さんが斯うした生活から報みられるものは、たゞ耐らない淋しさだけである。」<sup>42)</sup>

ここで北村が述べている「ゴマカス生活」とは、自分の信念に反し、家族を養うために教師以外の副業をし収入を得ることを指している。彼はこうした生活を営む神戸市の多くの音楽教師と自分を比較しながら、自らの生き方について次のように述べている。

「お父さんとでも棒給以外の収入を強ひて求むるならば得られないことは無いであらう。K市に於ける音楽の先生が殆ど凡てが、自宅に於いて教授するとか、出張教授をするとか、活動写真館で働くとかして、ひたすら棒給以外の収入を計つて居るのに、最も低い棒給で最も貧乏して居るお父さんは、お母さんの緊要に備へるためにも亦お前のよりよい成育のためにも、最少し金が無ければ困るのでありながら、更に此の方面に手をつけ様とはしない。」<sup>43)</sup>

北村のものがきや葛藤は、家族の生活の安定と自らの信念とのはざまに生じる亀裂に対する苦悩からくるものであった。彼は、「お父さんの悩みはこゝにあるのだ」「凡夫にして生命至上の要求に生くことの何と難しいことであらう」<sup>44)</sup>と、その心情を訴えている。現実生活に直面することによって、亀裂のはざまにあった北村だが、「その日その日をどうにかこうにか過し去るごまかし生活には到底耐へられない」<sup>45)</sup>彼は、「人間の虚偽と虚飾を嘲笑」し、「此の小さい貧しい生活」を「大きな愛と親和の泉が盛りこぼれて居る」ように、「純真さと心の伸びやかさとが湛えられて居る」ように、「出来るだけ人間性の奥底に流れて居る、人としての普遍にまで導き入れて行かうと努め」<sup>46)</sup>ながら、「人としての生活をよりよく生く」<sup>47)</sup>ことしかできない自分であると認識し<sup>48)</sup>、この亀裂から脱しようとしている。北村がこのような境地へと至った背景には、「人間は無一物となつた時に、始めて真の幸福に恵まれるのだ」<sup>49)</sup>との考えが横たわっている。すなわち、人は無一文になったときにこそ、「内的境地、心霊の自由」が得られ、それゆえにこうした生活が「私達の天国」<sup>50)</sup>になると考えたのである。

## 第3章 音楽教育論への連動と特質

困窮生活から得た「人としての生活をよりよく生きる途」、ひいては「人類を救ふ途、向上さす途」<sup>51)</sup>を志しようとする北村の生き方の信念は、彼の音楽教育論においても強く反映されている。北村が葛藤し苦悩した先に見出した人間のあり方は、物質的豊かさよりも精神的豊かさに重きを置き、内的教養を追求していくものであった。そしてその語り口から発せられる言葉は、「大きな愛と親和の泉」「純真さと心の伸びやかさ」「内的境地、心霊の自由」「美にさ迷ひゆく」といったように、抽象度の高い理想主義的色合いが濃いものである。第1章で述べたように、彼が企図した「音楽的美的直観」の教育による美的陶冶において、子どもは音楽から真・善・美を感受することによって、純美な心を有する存在として理想化されていた。北村には音楽教育あるいは子どもを論じる際に、ここで述べたような抽象的・理想的な言葉を駆使する特徴が見られる。また、「人類を救ふ途、向上さす途」との考えは、「人類的愛」「人類的親和」に満ちたユートピア的な世界・国家を目指していた北村の音楽教育思想と合致するものであり、それをなさしめるために、上述の子どもを形成するための音楽教育思想と実践が産出される。

このことが鮮明にうかがわれる北村の実践の一例を、以下に示してみよう。この実践報告は、北村の最初の著書『音楽教育の新研究』の中の「児童の歌曲鑑賞に乱され咲く花」と題された項目に含まれている。彼は、唱歌教科書『尋常小学唱歌』からいくつかの曲を子どもに聴かせ、子どもの感想を載せている。この感想は、「児童の空想活動なるものが、どんなに自由で、どんなに豊潤で、どんなにナイーブであるのかを、最も雄弁に、語り得る」<sup>52)</sup>証拠として提示されたものである。本論では、「爽快な中に、子供らしい元気のある、明る味に富んだ歌曲」として北村が見なしている《豊臣秀吉》を取り上げる。なおこの活動は唱歌としてではなく、北村の弾奏による器楽音楽として扱われているが、歌詞を参考に記しておく。

《豊臣秀吉》<sup>53)</sup>

- 一、百年このかた 乱れし天下も、千なり瓢箪 一たび出づれば、四海の波風 忽ち治り、六十余州は草木も靡く、あゝ太閤豊太閤
- 二、余力を用ひて 朝鮮攻むれば、八道見る間に 我手に破られ、国光かがやき 国威あがりて、四百

余州も 戦き震ふ、あゝ太閤豊太閤

【子どもの感想】<sup>54)</sup>

- ・心がサワサワときれいです。
- ・敵が向かうにゐるときに、□しく進んで行くやうな心持。
- ・勇しい唱歌で(曲の意味)又強みが有る。
- ・心持がよくなつて、自ぜんに手足がうごく様になりました。
- ・どこからともなく、人がとんで来る様な気がする。
- ・むかうから、波がくるやうで、おもしろい。
- ・私、からだか、すきすきになりました。
- ・私の心が唱歌の世界へ、行つたやうな心持がした。
- ・勇しく、いくさをやつて居るやうな、気がします。

「自律的な音楽」を支持する立場から、「純粋な音楽を聴かせ様とする心持ちからは、楽曲に歌詞を附する事さへも一仮令それがどんなにしつくりと融合されてゐる場合を想像しても一避け度いと思ひ、<sup>55)</sup>「たゞ音楽固有の独自性に依つて表現されるより外に方法がない」<sup>56)</sup>と考えていた北村は、《豊臣秀吉》の例に見られるように、本来楽曲が有している歌詞の意味内容を含む特性をまったく無視し、器楽鑑賞曲として新たに再編した音楽指導を行っている。彼はこのように、愛国主義的な楽曲でさえも美的教育へと転化させるのである。上にあげた子どもらの感想を総括して北村は、「私は是れ等の一つ一つに就いて、美しく輝いた様な可愛い花を眺める様な、楽しい又魅せられた心持で、一つ一つの花から、匂ひこぼれる色と香とを、味つて行くのである」<sup>56)</sup>と述べている。この言から、「音楽的美的直観」の教育を通して、子どもをあくまでも純粋で可憐で詩的で美的な存在として表象しようとしていることが読み取れる。彼は子どもを決して俗化させることはなく、ここに示した実践報告が物語るように、あくまでも自らが希求する子ども像へと抽象化・理想化させる。

北村が、困窮という現実生活と自分の信念との軋轢から生じる苦悩の中から模索したものは、「人としての生活をよりよく生きる」ための精神的豊かさであったが、彼はこの信念との同質性を「自律的な音楽」に包摂される真・善・美に見出したのではないだろうか。だが、北村が自らの生き方の信念と音楽教育論を重ね合わせ、両者の往復運動によりいっそう理想の教育の姿が強固なものとなる時、個々の音楽の持つ特性を軽視する特質と、実践の中に生きる子どもをもリアリ

ティのある個別的な存在から、一様に美的で純粋な存在に抽象化してしまう特質を産出することとなったのである。

おわりに

本論では、教師の「人生探究誌」とでもいうべき『教育文芸』に寄せられた二つの随想を基に、困窮生活から汲み取った自らの生き方の信念も含めて芸術教師として生きようとし、理想とする音楽教育を具現しようとした北村の姿を描出した。彼は、ときには家族を犠牲にしながらも、内的教養を深めることによって得られる精神の充実を信念とした「ゴマカサナイ生活」を貫き、子どもたちとともに、自ら創出した「音楽的美的直観」の教育を営んでいた。北村のこうした基本的姿勢はこの時期だけではなく、昭和期においても引き続き貫かれている<sup>57)</sup>。

本論で述べた北村の芸術教師としての生き方は、大正新教育において顕著に見られる一つのタイプでもある。上野浩道は、『芸術教育運動の研究』(1981年)において、「文学型教師」の系譜と特質を論じているが<sup>58)</sup>、その中の人物に志垣寛と桜井祐男をあげている。上野は、桜井と志垣の教師としての生き方の特質について、「彼(筆者注：桜井)のゆきついた結論も、志垣と同じように、教育即生活というものであった」<sup>59)</sup>と評しているが、まさに北村も彼らと同じく、「教育即生活」を体現しながら音楽教育を行っていた。

北村の音楽教育論が生活の信念から形づくられているものなのか、反対に生活の信念を貫くために音楽教育論が産出されているものなのか、その因果関係については用いた史料から明確にいうことはできない。だが本論を通し、北村が理想とする芸術教師として自らの生活を生きようとしたこと、そして両者の相即的な関係によって、彼の美的陶冶論がよりいっそう堅固なものとなったことだけは確かなことと思われる。

今後の課題は、さらに音楽教師たちの内面をうかがえる史料を可能なかぎり蒐集し、芸術教育としての音楽教育を打ち出した彼らの音楽教師の信念と音楽教育論の特質を根底から明らかにすることである。

(指導教官 佐藤学教授)

注

1) 例えば青柳善吾は、ここで述べた北村の思想と実践が如実に描出されている『音楽教育の新研究』(1926年)に対して、次のよう

に評している。「兎に角く、従来の唱歌教授法とは全然趣を異にし、問題の一つ毎に学問的根拠を求め、そこから音楽教育理論を樹て、実際指導案を導き出して居る処に特異性がある。刊行数年ならずして数千部を重刷されたと云ふことは希有のことであり、如何に広く読まれたかが窺われる。本書が音楽教育と表題し、哲学的な研究を試み、大正期の最後を飾つたことは、やがて昭和期の音楽教育が一大躍進を試みる前提とも見られる。」(青柳善吾『本邦音楽教育史』青柳寿美子、1987年4月、46頁)

- 2) 北村の音楽教育論を扱った論文として、三村真弓「北村久雄の音楽教育観」(『広島大学教育学部教科教育学科音楽教育学研究紀要VI』1999年3月)があるだけである。
- 3) 遺族の北村徹郎氏によれば、1921(大正10)年に故郷長野から神戸に移った理由として、「当時、白樺を通じ神戸にも気脈を通じあう知人がいて文通や行き来をしている中に己の新天地を神戸に見出し」たことによると述べており、信州白樺運動の影響を受けていることが分かる(徹郎氏への調査は、筆者が質問事項を記したアンケート用紙を郵送し、返答してもらった形をとった)。
- 4) 北村の自由画教育に対する傾倒ぶりは、機関誌『芸術自由教育』創刊号の応募論文に投稿したこと、わずか10号しか発行されなかったにもかかわらず、5本の論文を寄せていることからうかがえる。
- 5) 美的教育思想に影響を受けた教育者たちによって編まれた『芸術教育の最新研究』(帝国教育会編、文化書房、1924年6月)に、北村は「音楽教育の芸術的要義」という論文を寄せている。
- 6) 北村久雄「貧しき父—嬰兒潮に与へて—」『教育文芸』創刊号、博多成象堂、1924年1月、106-120頁。
- 7) 北村久雄「淋しい妻とのはなし」『教育文芸』五月号、博多成象堂、1924年5月、42-48頁。
- 8) 前掲書、北村「貧しき父」109頁。
- 9) 北村久雄「音楽教育の新研究」モナス、1926年12月、19頁。
- 10) 小出浩平「唱歌新教授(文化中心新教授学体系第十二巻)」教育研究会、1927年9月、8頁。
- 11) 同上書、4-5頁。
- 12) 前掲書、北村「音楽教育の新研究」13頁。
- 13) 同上書、206頁。
- 14) 調和的人間形成の理想において、真・善・美の間には、確然とした価値原理の区別をおかず、汎律性を特徴とする思想に端を発していることから、カロカガティアにおいては、美的教育はただちに知的教育であり、道徳教育であり、宗教教育となる(『美的教育論』『美学事典 増補版』弘文堂、1980年7月、471頁および「カロカガティア」同上書、499頁)。
- 15) 同上書、470-471頁。
- 16) 例えば前掲書、帝国教育会編『芸術教育の最新研究』に寄稿している芸術教育運動のリーダー的存在である執筆者の多くが、ここであげた人物の思想に影響を受けていることが各論文からうかがえる。
- 17) 前掲書、北村「音楽教育の新研究」611-612頁。
- 18) 同上書、261頁。
- 19) リンアの教育論とは、「教育を人格、心情の力と考え、個性中心の教育を主張し、その教育において芸術の力を重視した」ものである(国安洋「芸術教育論」日本音楽教育学会編『音楽教育の展望』

- 音楽之友社, 1987年4月, 46頁)。
- 20) 大正期においてリンデの人格教育論は, 例えば山本寿の「リンデ氏も言つて通り教師の靈感的な美しい声に依つて児童に感動を与へることは児童の学校生活全体を通じて最も重要なことである」(山本寿『小学校に於ける唱歌教授の理論及實際』日黒書店, 1918年1月, 11頁)という言から, 北村だけではなく, 第一線で活躍していた他の音楽教師たちにも影響を与えていたことが推測されるとともに, 北村と同じ理由から教師の人格を重要とみなしていることが分かる。
- 21) 前掲書, 北村『音楽教育の新研究』, 612頁。
- 22) 木戸若雄「桜井祐男の『教育文芸』」『大正時代の教育ジャーナリズム』1985年2月, 89-90頁。
- 23) 桜井祐男「巢立する言葉」『教育文芸』創刊号, 博多成象堂, 1924年1月, 2-5頁。引用の傍点は原文のまま。
- 24) 上野も, 桜井と『教育文芸』に関して, 「桜井は教育の諸形式を拒否し, 同好の士を求めて, 教師の創作活動という文学の側から, 教師の姿勢を人間性をもったものとして回復し, 教育の本質に迫っていかうとした」と, その特徴を述べている(上野浩道『芸術教育運動の研究』風間書房, 1981年2月, 367頁)。
- 25) 野村芳兵衛「教育行脚」『野村芳兵衛著作集(8)私の歩んだ教育の道』黎明書房, 1973年2月, 76頁。
- 26) 中野光／高野源治／川口幸宏『児童の村小学校』黎明書房, 1980年2月, 168頁。
- 27) 北村がどのような経緯で『教育文芸』に投稿したのかは不明である。しかし, 「淋しい妻とのはなし」の中で, 「桜井兄」と親しみをこめて語りかけていることから, 桜井と懇意にしていたことがうかがわれる。
- 28) 前掲書, 北村「淋しい妻とのはなし」42頁。
- 29) 『資料 臨時教育会議 第一集 総覧(解説および基本資料)』文部省, 1979年3月, 42-43頁。
- 30) 例えば, 片桐佐太郎「初等中等学校教員俸給は如何なる程度を以て最も適当とすべきか」(『帝国教育』9月号, 帝国教育会, 1919年)や, 宮田修他「教員生活の脅威—諸家の所感並対策意見—」(『教育持論』1614号～1616号, 開発社, 1930年)など(寺崎昌男／前田一男編『日本の教師22 歴史の中の教師1』ぎょうせい, 1993年10月に所収)。
- 31) 神戸市においては, 小学校教員に対し一律8円の住宅料が支給されている。なお1928(昭和3)年には不況下により住宅料が6円に減額されている(『神戸市教育史第一集』神戸市教育史刊行委員会, 1966年3月, 716頁)。
- 32) 前掲書, 北村「貧しき父」110頁および118頁。
- 33) 同上書, 110-111頁。引用の傍点は原文のまま。
- 34) 同上書, 118頁。
- 35) 同上書, 111頁。
- 36) 同上書, 119頁。
- 37) 同上書, 117-118頁。なお, 北村が美の世界へと誘われた, ここに記されている西洋絵画の数々は北村の著書, 例えば『音楽教育の新研究』の扉絵に使用されており, 「音楽的美的直観」による美的陶冶の象徴として機能している。
- 38) 前掲書, 北村「淋しい妻とのはなし」46頁。
- 39) 前掲書, 北村「貧しき父」118-119頁。
- 40) 同上書, 119頁。
- 41) 同上書, 107頁。
- 42) 同上書, 107頁。
- 43) 同上書, 119頁。
- 44) 同上書, 119頁。
- 45) 同上書, 119頁。
- 46) 同上書, 107頁。
- 47) 同上書, 119頁。
- 48) 北村はこのことについて, 「潮よ, お父さんは人間性のどん底から涙み来たつた, 斯うした生一本な信念に, たゞ一途に頼つて生き様として居るのだ」と述べている(同上書, 107頁)。
- 49) 前掲書, 北村「淋しい妻とのはなし」45頁。
- 50) 前掲書, 北村「貧しき父」120頁。
- 51) 同上書, 119頁。
- 52) 前掲書, 北村『音楽教育の新研究』667頁。
- 53) 海後宗臣編『日本教科書体系 近代編 第二十五巻 唱歌』講談社, 1965年9月, 308頁。なお, 北村は『豊太閤』と称している。
- 54) 前掲書, 北村『音楽教育の新研究』672-673頁。
- 55) 同上書, 684頁。
- 56) 同上書, 680頁。
- 57) 「貧しき父」が, 昭和期に入り新たに『教員生活創作集』(文化書房, 1931年7月, 193-216頁)に転載されていることから分かる。
- 58) 「文学型教師」については, 前掲書, 上野『芸術教育運動の研究』339-382頁を参照。
- 59) 同上書, 366頁。